ロシアの中央アジア進出とイラン東北部の社会経済的変容

── 西暦1890年代のホラーサーン ──

水　田　正　史

目　次

序　　言
Ⅰ　貿易の主要な展開
Ⅱ　マシュハドへの人口流入と同市における建築ブーム
Ⅲ　ロシアの中央アジア進出とホラーサーン農村の貨幣経済化
　── 穀物輸出・綿花輸出・パン暴動 ──
結　　語

序　　言

西暦1880年代初頭（以下,「西暦」を略す), ロシアは中央アジアへの進出を一応完了した。イラン東北部ホラーサーン地方（以下, 単に「ホラーサーン」と略記）は今や大国ロシアと国境線を接することとなった。これは, ホラーサーンにとって, 巨大なインパクトであったにちがいない。このインパクトによって, ホラーサーンの社会経済は大きく変容したものと思われる。このような見込みのもと, 筆者は1890年までの時期について, 主に貿易に焦点を当てて検討を加えてきたが, 1880年代にはそのような変容は見出せなかった（水田〔3〕〔4〕)。これを承けて本稿では, 対象時期を1890年代に移し, 研究を進めていくこととする。

研究史を回顧するならば, この問題を主題として論じた研究は, 管見の限

り世界的に見て皆無である。その意味で，本稿は，不十分ながらも研究史の空白を埋めるという意義を有するものである。

史料はホラーサーンの州都マシュハドから本国外務省へと送られたイギリス領事報告を用いる。

I　貿易の主要な展開

まず，各年次の報告書の貿易に関する部分を簡単にまとめていくことにする。

各報告書には，かなり詳細な貿易統計表が掲げられているが，本稿では，それら貿易統計表の数値をして語らしめるという方法は採らず，各報告者の文章によるコメントに依拠して議論を進めていくことにする。なぜならば，報告者たちも述べているように，統計数値そのものの信頼性に問題があるためであり，加えて，年次によって統計のカヴァーする範囲が一定しないからである。

以下，時系列的に各年次の報告書を見ていくことにしよう。

1　1890／91年

ロシアは，綿製品と砂糖のいずれについても，他国産品の駆逐に成功した。砂糖の輸入が巨額であったのは，ロシア政府が輸出奨励金を打ち切るとの噂が流れたためであった。輸入された砂糖の多くは国境付近に取り置かれ，それらは，ロシア領における砂糖価格がより高かったため，アシュハーバードへと密輸出された（「90／91年報告」p. 2）[1]。

2　1891／92年

「全体として，イギリスの貿易もロシアの貿易も改善した」。インディゴの輸入額に前年度と大きな開きがあるが，それは，南部地域と西部地域が，統計のカヴァーする範囲に含まれていないことに部分的に起因するものであ

る（「91／92年報告」pp. 2-3）。

ロシアからの砂糖輸入が減少したが，これは，他の砂糖を市場から駆逐し終えたロシア政府が，1891年5月1日に砂糖輸出奨励金を打ち切ることを知った業者が，同年はじめに，すなわち1890／91年に大量の砂糖を輸出したためである。

ロシアからの反物輸入は過剰在庫によって減少したが，ロシアの反物の質が向上していることは疑いない。イギリスとインドの捺染綿布を模倣することにより，今やロシアの捺染綿布とそれらとを見分けるのは難しい（「91／92年報告」p. 3）。

作柄はすべての作物について非常に良かったが，特に，穀物とアヘンが良かった（「91／92年報告」p. 6）。

3　1892／93年

「イギリスの貿易は多方面にわたって改善し，ロシアの貿易は減退した」。イギリスのイランへの輸入貿易額はロシアのそれの3倍にものぼるが，これは，次の点を割り引いて考えなければならない。すなわち，イギリスからの輸入として統計に計上されているものの中には「イギリスの貨幣によって購入されボンベイ経由でペルシャへともたらされた中国茶」が含まれているという点である。「もしこれを差し引けば，我々の貿易額は，ロシアの検疫がロシアの貿易をだいなしにしているのにもかかわらず，ロシアの貿易額と同等であるとはとても言えない」（「92／93年報告」p. 3）。

この検疫とは，この年（1892／93年）の初め（「91／92年報告」p. 1）に発生したコレラに引きつづいて何カ月ものあいだ実施されたものである（「92／93年報告」pp. 3，6，7）。

「ロシアは競合するイギリス製品をマシュハド市場から駆逐したのみならず，すばやく南進し，中部ペルシャで同じことを始めている。――〔中略〕――〔ロシアの〕意図は，ホラーサーンの砂糖貿易および捺染綿布貿易を完全に手中に収め，

これらの品目について，他のすべての競争者を市場から完全に駆逐することである。前者については，彼らはすでに成功した」（〔　〕内は引用者による補筆，以下同様；「92／93年報告」p. 4)。

4　1893／94年

「昨年〔1893／94年〕の貿易の結果は驚異的で，かつ満足できるものであった。しかし，これは，おそらく2度と起こることはないであろう2つの原因にもっぱらよるものである」。

第1に，これが主因であるが，ロシア政府とブハラのアミール（首長）とのあいだで，ロシアの関税システムの範囲をブハラまで広げるという旨の合意がなされたこと，ならびに，ロシア政府がまもなく，この方面の国境全域に厳格な関税の線を張り巡らせようとしていたことである。これまでは，ほんの名ばかりの税だけで済み，サマルカンドに達するまでは禁止的な高率の関税は課せられなかった。そこで，自らの「貿易の大部分が停止させられる」ことを恐れたインド商人[2]たちは，禁止的な高率の関税が導入される前にきわめて大量の商品を持ち込み，国境を越えさせようとしたのである。

第2に，為替の不安定である。

「銀とペーパー＝ルーブルの変動が大変不規則であり，このような状況下では，ビジネスは停止するか純然たるギャンブルになってしまうかである」。

しかし，このことは，イギリス貿易に，以下の2つの点でプラスに働いた。

第1に，為替が不安定であるため，ロシア商人もイギリス商人も価格を上げたが，値上げ幅は，ロシアの商品のほうが，イギリスのものよりもかなり大きかった。このため，イギリスの商品に比べて品質は劣るものの価格が安いというロシアの商品の優位は崩れ，反物に関しては，完全にイギリス側優

位へと局面が転換したのである。

「第2に，イギリス商人はロシア商人より裕福で，より小さな利益で満足である」ため，為替が不安定であることの影響がより小さかったという点である（「93／94年報告」p. 2)。

以上の理由でイギリスの輸入は増えた。輸入量が顕著に増加したものとしては，インディゴ（2倍)・スパイス（膨大な量)・反物（1.5倍）を挙げることができる。

ロシアからの輸入額は，全体としては前年とほぼ同じであった（「93／94年報告」p. 3)。

1893年秋にラシュトからの巡礼がコレラを持ち込んだが，その影響は長くは続かなかった。

1893年11月17日に，地震でクーチャーンが壊滅し，5,000人が死亡した。マシュハドでも激しい揺れを感じた（「93／94年報告」p. 6)。

5　1894／95年

1895年1月17日，またもクーチャーンを地震が襲った。揺れの激しさは前回同様で，クーチャーンは再び崩壊した（「94／95年報告」p. 15)。

ロシアとイギリスからのそれぞれの輸入額について，（イギリスから輸入されロシア領へともたらされる緑茶を除いて）昨年と比較すると，「ロシア貿易はかなり衰退し，イギリス貿易は改善した」。満足すべき結果だが，今後もこのままであるようには思われない（「94／95年報告」pp. 2-3)。

今年の結果は，昨年の好結果をもたらした2つの原因が今年も作用しつづけたためである（「94／95年報告」p. 3)。

6　1895／96年

1894年は，作柄は，長いあいだを振り返っても最良だったが，1895年はそれをさらに上回った（「95／96年報告」p. 21)。

イギリスからの輸入額が大きく減少したが，これは，1895年初めに関税が

導入されたためである（「96／97年報告」p. 3)。

7　1896／97年

この年は輸入が大幅に減少した。その原因としては以下の5点が挙げられる（「96／97年報告」pp. 3-6)。

① これが主因であるが，ロシア政府がザカスピ国境に新たな関税規則を導入したこと。これによって，茶・インディゴ・モスリンなどを除くすべてのヨーロッパおよびイギリス＝インドの商品が中央アジア市場から排除された。

② これも非常に重要なことなのだが，インドからロシア領へ向かう貿易のルートが，バンダル＝アッバース・マシュハド経由からバトゥーム・バクー・クラスノヴォーツク経由へと転換したこと。

以上の2点は，貿易に永続的な影響を与える要因である。これに対し，一時的な要因としては以下の3点を挙げることができる。

③ マシュハドへの巡礼の減少。1896年5月1日のシャー（イラン国王）の暗殺によって，人々は平和が永続しないのではないかという「大変な戦慄」(great trepidation）に襲われた。道中の安全についての懸念のため，このような状況でなければ巡礼に行ったであろう多くの人々が巡礼に行かなかった。年の後半には人々はようやく心の平安を取り戻しつつあったのだが，今度は宰相の突然の解任という事態が出来した。このようにして，この年を通じて，マシュハドへの巡礼は非常に少なく，したがって，大量の商品が売れ残った。

④ イランのインドおよびアフガニスタンに対する貿易が停止したこと。ボンベイで疫病が発生したため，イラン・アフガニスタン間の交通が，商品についても人についても完全にストップし，イギリス領バルーチスターンとイランを結ぶ道路も完全に閉鎖された。さらに，イラン暦新年（1897年3月21日）のためのインド商品を運ぶ隊商が，ホラーサーン内で足止めされた。

またアフガニスタン・ロシア領間の道路は，すべての商品・人について開かれていた。このようにして，すべてのアフガニスタン貿易はイランからロシア領へと転じ，インド・ホラーサーン間貿易は当分のあいだ停止した（なお，ホラーサーン・ザカスピ間はロシア当局によって自由通行が許されていた）。

⑤ 食料の不足。マシュハドは人々の主要な食料品であるギー（液状バター）と豆類と粒の粗い米とを大幅にヘラートに依存していた。上記④により，これらが入らなくなり，これらの価格が100～200％上昇し，さらに，これら以外の日常消費物資の価格も非常に大きく上昇した。その結果，商品一般への需要が大幅に減少した。

以上の5つに加え，1894／95年の輸入が異常に大きかったことによる過剰在庫のため，マシュハドの商業は麻痺した。地域内の必需品に関するもの以外はほとんどビジネスが行なわれなかった。商人たちは全般的に，利益をほとんど，あるいはまったく上げられず，倒産する者もいた（「96／97年報告」p. 6）。

前年（1895／96年）まではイギリスの対マシュハド貿易額はロシアのそれを上回っていたが，上述の理由により，今やそれは逆転した。ロシアからの輸入は3年間着実に増加したのに対し，イギリスからの輸入（ボンベイ経由の中国茶を含む；イスタンブル・タブリーズ経由の反物は含まない）は減少した。輸出については，ロシア領へは1894／95年から1895／96年へ228％増えているのに対し，イギリスへのそれは，1896／97年は2年前よりははるかに大きいが，前年よりは少ない。

イギリスからの輸入について最も特徴的なことは，本年の，イギリスの対中央アジア貿易の主要品目である茶とインディゴが異常に減少したことである（「96／97年報告」p. 6）。

マシュハドの商業的重要性は対ロシア貿易のみならず対イギリス貿易にもよるものであった。マシュハドは，茶・インディゴ・スパイス・インド産反物の中央アジア市場への流通センターとしての役割を担っていた。

マシュハドは，この商業的重要性を，上記①②により，完全に剥奪されてしまった。マシュハドは以前の繁栄を取り戻すことはないであろう。

ロシア政府は，輸出奨励金交付，道路建設，ホラーサーン各地への領事館のエージェンスィーの配置などによって貿易拡大の努力をし，成功を収めている。こうした政府の措置に支えられて，ロシア商人たちはホラーサーン全域で商売を始めている。彼らの取引は，一般的に，即金で行なわれている。これは3カ月から20カ月，場合によっては50カ月にわたるイランの信用取引の期間につきものの損失を避けるためである。このようにして彼らは貿易をホラーサーン全域，そして，イギリス国境近くのスィースターンにまで前進せしめつつある。

イギリスの商品はこれらの地域へイギリス商人・インド商人によってではなく，村の小売店主・巡礼・旅行者・ラクダ引きによって運ばれる。イギリス商人・インド商人には，ロシア商人が享受しているような便宜はなく，彼らは日々，地歩を失いつつある（「96／97年報告」p. 7)。

ホラーサーンでロシアと競争できるイギリス＝インド製品の主要輸入品目は綿糸と反物である（「96／97年報告」pp. 9-10)。

クエッタからスィースターン経由でマシュハドに至る貿易ルートが開かれ，領事館の保護などの便宜が与えられれば，イギリス＝インド商人の地位はある程度改善するかもしれない（「96／97年報告」p. 7)。

1896年12月，インド政庁はインドと東部イランとを直結するクエッタ・マシュハド間の貿易ルートを開設する手はずを整えた（「96／97年報告」p. 18)。

このルートは以下のような利点を持っている。まず，スィースターンの境域まではすべてイギリス支配下の領土を通るため，アフガンによる過酷な課税とバルーチの襲撃の恐れがないこと。次に，ラクダに食べさせる牧草が各宿駅で入手できること。そして，所要時間もバンダル＝アッバース・ケルマーンルートと比べて短いこと。そして，カラチ・バンダル＝アッバース間の海路を避けられるということ。

この道路はすでに好まれる兆候を示しつつあり，イギリス＝インドの対スィー

スターン・ホラーサーン貿易を大きく拡大せしめるように思われる（「96／97年報告」p. 19）。

8　1897／98年

インドからの輸入は，前年に比べれば40,735ポンド増加しているが，これは前年が異常に低水準であったためであり，2年前までの3年（1893／94年・1894／95年・1895／96年）に比べると減少している[3]。

これに対し，ロシア領からの輸入はここ4年（1894／95年以後），着実に増加している。このことが，ザカスピ鉄道とマシュハド・アシュハーバード間の荷馬車道の存在に起因するものであることは疑いない（「97／98年報告」p. 3）[4]。

9　1898／99年

本報告が基づく統計はマシュハドのものであり，ホラーサーン全体のものではない。

この年は貿易は栄え，輸出入ともその額は前年を上回った（「98／99年報告」p. 3）。

10　1899／1900年

インドからの輸入増には特にこれといった理由は見出せない。ロシア領からの輸入増は，ロシア政府からの輸出奨励金とザカスピ鉄道によるものである。

マシュハドからロシア領への輸出が増加しているが，これは，1つには，アシュハーバードにおける軍隊が生み出した大きな需要によるものであり，今1つは，鉄道によって，ザカスピ地方へと安価に輸送できるようになったことによるものである（「99／00年報告」p. 3）。

マシュハドの輸出入総額の増加は，ホラーサーン全域の繁栄，領事および領事エージェントの存在，輸送中の荷の安全の増大，および通信の改善，こ

の4点によるものである（「99／00年報告」p. 4)。

Ⅱ　マシュハドへの人口流入と同市における建築ブーム

「90／91年報告」において注目すべきは，マシュハドへの人口流入と同市における建築ブームについての記述である。

「最近，多数の人々がペルシャ全土から，そして特にアーザルバーイジャーンから，ここに住みつくために，家族とともにやってきた。カフカースからも多くの家族がやってきた。資力を持つ者は家を建てるか購入するかした。古く荒廃した家屋が建て替えられ，非常に多くの新しい家が建てられた。その結果，土地の価格が大幅に上昇した。数年前には，その平均価格は平方ヤード当たり1ケラーンだったのが，今はそれは，場所によってちがいはあるが，4ないし5ケラーン，あるいはそれ以上である。家賃は2倍になり，日々上昇しつつある。貸家は見つけるのが難しく，多数の隊商宿が新たに建設されているとはいえ，最近マシュハドに到着した多数の人々は宿泊場所を見つけるのに大変困っている。また，多数の店舗が最近，新たに建築された。――〔中略〕――マシュハドにおける建築に与えられた刺激により，石工の賃金は1890／91年を通じて25％上昇した」(p. 9)。

この人口流入と建築ブームの原因が何であるのかについては，本報告書では何も述べられていないが，同報告書中の別の箇所における次のような記述が注目される（p. 12)。

「ダッレギャズまでの電信線が完成した。しかし，はるかに必要性の高いビールジャンドまでの線はまだ着工されていない。

1890年12月，ロシアの線とペルシャの線とが，ペルシャ領サラフスとロシア領サラフスとの中間で結合した。

マシュハド＝アシュハーバード道路がこの報告書の年に完成し，この道路沿い

のしかるべき宿駅に宿と隊商宿が建てられた。

しかし，それは，ヨーロッパ的基準からするならば，まだ非常に未整備で不完全な状態にある。

この道路は巡礼が大変よく利用し，荷車の商売が繁盛している」。

電信線と道路の建設がマシュハドの好況と何らかの関係があるのではないかと，以上から推測されるのである。そして，電信線と道路の建設は，ロシアの中央アジア進出を背景としていることは言うまでもない。

ロシアは1880年代に中央アジアへの進出を完了したが，少なくとも80年代の内には，それはホラーサーンの社会経済に大きな影響は与えなかったようである。少なくとも貿易構造に関する限りはそうである（水田〔4〕)。この史料は，ロシアの中央アジア進出がホラーサーンの社会経済に与えた大きな影響の，時系列的に見た最初の例であると言える。

次年次以後の報告書にもホラーサーンへの人口流入と同市における建築ブームに関する記述が見られる。

流入した人口がどこから来たかについては，「96／97年報告」では，上記のアーザルバーイジャーンとカフカースのみならず，ヤズドとケルマーンの名も記されている。彼らは「過去5年間にやってきてこの町に永住し，人口をかなり増やした」(p. 33)。

彼らがマシュハドに来た理由を明記しているのは「99／00年報告」である。

「ケルマーン・ヤズド・アーザルバーイジャーンといったペルシャの他地方における〔農業生産物の〕欠乏のゆえに，これら〔不作〕の作用を受けた地方から多くの人々が来て，ホラーサーンに住みついている」(p. 7)。

アーザルバーイジャーンとカフカースからの人口流入に関する興味深い記述が史料中にいくつか見られるので，以下，紹介しておこう（なお，これらの地方にはトルコ人が多く住んでおり，ロシア領中央アジアにもトルコ人が

多く住んでいるということ，すなわち，言語的・「民族的」類縁性が両者のあいだに存在するということを念のため申し添えておきたい)。

「マシュハド市域内部での武装は，大変きびしい罰をもって，総督によって禁止されている。しかし，特にカフカース地方からの巡礼が，しばしば，この命令の網をくぐる」(「90／91年報告」p. 12)。

「〔武器は〕ロシア領〔中央アジア〕からロシア臣民のトルコ人によってもたらされる」(「90／91年報告」p. 12)。

「マシュハドの浮動人口は平均して8,000人であると言われており，内半数以上がカフカース地方からの巡礼である」(「90／91年報告」p. 9)。

「マシュハドには400人ほどロシア臣民がおり，主にアルメニア人とトルコ人(トビリスィとバクー出身)である」(「91／92年報告」p. 6)。

「ロシア臣民が多数いる。彼らは主にトルコ人で，ロシア国境から150マイルしか離れていないマシュハドの町にて商業を行なっている。アルメニア人商人も2名おり，羊毛のシーズンには，アルメニア人はこの地方に溢れ出る」(「92／93年報告」p. 2)。

この人口流入と建築ブームについては，本稿が対象としている時期の終わりである「99／00年報告」にも記述されている。

「マシュハドの町の人口はこれまで増加してきて，現在も増加しつつある。以前は住む者のいなかったいくつかの地区が今や家でいっぱいである」(p. 7)。

このように，マシュハドへの人口流入と同市における建築ブームは1890年代全体を通じて，途切れることなく展開していき，マシュハドの都市社会を大きく変容させたのであった。

Ⅲ　ロシアの中央アジア進出とホラーサーン農村の貨幣経済化
── 穀物輸出・綿花輸出・パン暴動 ──

この時期，ホラーサーンからロシアへ大量の穀物[5]が輸出された。(「92／93年報告」pp. 2，8，「93／94年報告」pp. 3，5，「95／96年報告」pp. 5，21，「96／97年報告」p. 27，「99／00年報告」p. 6)

どれほどの規模であったか，具体的数値は分からないが，史料中には「計り知れない」(immense) とか「莫大な」(enormous) といった語が使われていることから，尋常ならざる規模であったことは確かである。より具体的にその規模についてのイメージが描ける史料を以下に紹介しておく。

> 「穀物を積んだ50あるいは100頭のラクダの隊列が，収穫後，主要道路を通って毎日国境を越えるのを見ることができるであろう」(「93／94年報告」p. 5)。

そして，この輸出は，それを禁じるシャーの命令があったにもかかわらず行なわれた。すなわち，密輸出であった (「92／93年報告」pp. 2，8，「93／94年報告」p. 5，「95／96年報告」p. 21，「96／97年報告」p. 27)。この禁令はイランのような国にとっては大変必要性の高いものである。というのは，イランのような貧しい国では，人口をようやく養うに足る程度の穀物しか産しないので，それが不足し高価になったら，かなりの人が飢えることになるからである (「92／93年報告」p. 2)。この危険性はすでに「92／93年報告」で指摘されているが (p. 2)，翌年には，小麦不足に起因するパン価格高騰 (4倍)・パン暴動が起こった (「93／94年報告」p. 5)。

イランからの小麦輸出には，ロシアの投機家が大きく関与していた。すなわち，ロシアの投機家が新年の1～2週間前にホラーサーンの農村にやってきて，彼らのために綿を播種する ── 種は彼らが提供する ── ために地主に前貸しするか，収穫する小麦の大部分を前もって買い上げる (「93／94年報告」p. 5)。この小麦と綿花は，羊毛と並んで，ホラーサーンのロシアへの

主要輸出品目の1つであった（「94／95年報告」p. 13）。そして，小麦と綿花は，生産者にとって競合的関係にあった。このことは，上に述べたことからもうかがえるが，以下にも明確に指摘されている。

「このこと〔ロシアの投機家が綿を播種するよう種を提供したこと〕もまた，〔大量輸出による穀物不足とともに〕パンが高価な時にはその人口の大部分が多大な苦痛に耐え忍ばなければならないような国においては，パンの価格を上昇させる傾向を持つであろう」（「94／95年報告」p. 13）。

報告者が述べている通り，この綿花と小麦の競合が食糧事情に与える打撃は，豊作の時にはそうでない時と比べ少なくてすむであろう。1894年と1895年は大変な豊作であり，その翌年も豊作が見込まれた。そのため，「町における小麦価格も，小麦輸出のない場合と比べると2倍になってはいたものの，かなり低水準に収まっていた」。地主と農民は楽しい時を享受しているが，穀物不足の年は遅かれ早かれやってくるにちがいない（「95／96年報告」pp. 21，23）。

「他方で，このような豊作が続けば，小麦輸出が多くの者にとって恵みとなり，土地へと貨幣をもたらすであろう。私は，このことが，まったく享受する資格のない恵みであることが判明しないことを恐れる。というのは，このことによって農民がよりぜいたくになりつつあるからである。かつては，農民にとって軽い労働は，人生が必要とするところのものを与えるものにすぎず，それ以上ではなかった。そして，彼の最高の富は，富を知らないということであった。今や彼は貨幣に触れたのであり，それを持たなければならないのである。事実として，文明との最初の接触の結果としての不可避の経済革命が静かに生じつつあるのであり，それが成就するまでに，人々は苦楽双方を飲み込むことになるであろう」（「95／96年報告」p. 23）。

きわめて印象深い文章である。イギリス領事報告は，筆者がこれまで読んだものに関する限り，その地方の，通商を中心とした経済事情について，事実を事実として報告するというスタイルをとっており，このような記述は異例である。これはおそらく，報告者の個性によるものというよりは，報告者にこのように書かせる，まさに異例の歴史的出来事が進行していたということなのであろう。

2年前の報告書に次のような記述があるので，ここにつけ加えておこう。

「農民への支払はすべて現物で行なわれており，彼らの多くは貨幣にほとんど触れることがない」(「93／94年報告」p. 4)。

「穀物不足の年は遅かれ早かれやってくるにちがいない」との報告者の予想は翌年に的中することとなった。春の初めの豊作の予想に反して，過剰な降雨がたたり，季節をへて胴枯れ病が発生したのであった。

小麦の価格は1895／96年には5トマーン／ハルヴァールであったのが，この年は，秋の収穫後の価格が低くなるべき時でさえ6トマーン／ハルヴァールであり，さらに，その後8トマーン／ハルヴァールへと上昇した（「96／97年報告」p. 27)。

貧困階層は全般的に困窮に苦しんでいた（「96／97年報告」p. 28)。

このように，穀物はロシアへ密輸出されたわけであるが，なぜであろうか，そのロシア側の要因としては以下の2点を挙げることができる。

① ヨーロッパへの小麦の一大供給センターであるロシア＝プロパーの小麦よりイランの小麦のほうが安く調達でき，ヨーロッパで安く売れたため，投機家がこれを利用した。

公式統計によれば，1891年に2,113,079プードの穀物がザカスピ地方から輸出された。この内のどれほどがイランからもたらされたのか，興味深いところである（「93／94年報告」p. 5)。

② ロシア領中央アジアで綿作が進展したため，小麦の作付が減り，その

分を外部に依存した（「95／96年報告」p. 20）。ザカスピ地方および同地方における軍隊はその食料を，非常に大きくホラーサーンに頼っていた（「99／00年報告」p. 6）。小麦と綿との競合はここでも見られたのであった。

1892年，ホラーサーンにおける綿の栽培と対ロシア輸出が激増した。14万プードのイランの綿が，ロシアへ輸出するためにザカスピ鉄道で輸送された（「94／95年報告」p. 13，「95／96年報告」p. 20）。

ロシアからホラーサーンへの綿の種子の供給の規模はかなり大きなものであった。すなわち，ホラーサーンの1個人がある月にロシアの企業から受け取った綿の種子は20トンにものぼった。ヘラートにも2トン送られた（「94／95年報告」p. 13）。

ホラーサーンからロシアへの綿花輸出はホラーサーンのロシアからの綿製品輸入と密接に結びついていた。ロシア政府は綿製品に輸出奨励金を給付したのだが，これは，輸出業者が販売代金でもって綿花を買ってロシアへと送るという条件付きであった。綿製品の販売と綿花の購入のために4名のアルメニア人がニーシャープールに配置された（「95／96年報告」p. 20）。

結　　語

1890年代を通じて，マシュハドへの人口流入と同市における建築ブームが続いた。その原因の1つとして，ホラーサーンにおける電信線と道路の建設があり，これらは，ロシアの中央アジア進出を背景とするものであった。

また，この時期のホラーサーンの貿易を特徴づけるものの1つとして，ホラーサーンからロシア領への大量の穀物の密輸出を挙げることができる。これによって，ホラーサーンは穀物不足になり，パンの価格が高騰し，パン暴動が起こった。

この穀物の密輸出は，ロシアの投機家の主導によって行なわれた。彼らはホラーサーンの農村にやってきて，綿の作付か穀物の作付かの択一を地主に

迫るのである。すなわち，綿花と穀物は，この時期のホラーサーンにおいて競合していたのであった。

この競合は穀物の密輸出とともに，パン価格を高騰させるもう1つの要因であった。1894年と1895年，2年連続でホラーサーンは大変な豊作に恵まれ，地主と農民は経済的繁栄を享受していた。この経済的繁栄は，豊作であったがゆえに大量の穀物密輸出（および綿花と穀物との競合）がホラーサーンにおいてパン価格を高騰させないという，いわば偶発的好条件のもとでの繁栄であった。

この繁栄を報告しているイギリス領事は，同じ報告書の中で，ホラーサーンの農村内部への貨幣の浸透について書き記している。すなわち，ホラーサーンの農民が今や貨幣経済という「文明」の洗礼を浴びつつあるのであり，それは「不可避の経済革命」なのであるとのことである。この革命が成就するまでに人々は苦楽双方を味わうであろうと彼は続けているが，その苦とは，いわば貨幣経済化一般が有する苦しみ，富を知らないという最高の富を喪失してしまうという悲しみであるのみならず，豊作でなくなれば繁栄は終わってしまうということを知らないであろうホラーサーンの農民に対する報告者の悲しみの眼差しであるとも解釈することができるであろう。

この苦しみを，人々は翌年に味わうこととなった。小麦の価格は高騰し，貧困諸階層は全般的に困窮した。

ホラーサーンから密輸出された穀物は，ヨーロッパ市場までもたらされたものと，ロシア領中央アジアで消費されたものとに大別できる。おそらく後者が大部分であったであろう。ロシア領中央アジアの軍隊は，その食料を大きくホラーサーンに頼っていた。また，綿作が進展していたため，小麦の作付が減り，その分を外部に依存していた。すなわち，綿花と穀物との競合はここでも見られたのであった。

ホラーサーンのロシアへの綿花輸出は，ロシアからの綿製品輸入と密接に結びついていた。

以上のように，人口流入・建築ブーム，パン価格高騰・パン暴動，それに

農村の貨幣経済化といったこの10年間のホラーサーンの経済史の主要な展開のすべてが，何らかの形でロシアと――特にロシアの中央アジア進出と――関係していた。

1880年代初頭に一応完了したロシアの中央アジア進出は，同年代後半のザカスピ鉄道建設を経て，1890年代に入って，ホラーサーンの狭義の経済のみならず，社会経済全般を大きく変容せしめたのであった。

注

(1) 出典の指示などでイギリス領事報告を表記するに際しては，このような表記方法を採ることとする。

(2) 「イギリス貿易とインド貿易は，数名のインド人とペルシャ人の手中にある」(「92／93年報告」p. 2)。

「イギリス領事館員以外に，ホラーサーンには，昨年，登録されたイギリス臣民(戸主)が25名いた。その内10名は，その大部分が裕福なマシュハド在住インド商人であった。また，インド・マシュハド・ブハラのあいだを絶えず行き来している商人が7～8名，そして，ハーフにはヒンズー教徒が数名いた」(「91／92年報告」p. 6)。

「1980／91年のマシュハドにおけるイギリス商人の数は11名である。この数は，ゆっくりと増加しつつある。彼らは全員裕福であり，ブハラ・サマルカンドその他のロシア領中央アジアと大規模な貿易を行なっている」(「90／91年報告」p. 9)。

なお，本稿ではイギリスという語を，インドを含めて使う場合と，そうでない場合とがある。

(3) 本報告書では述べられていないが，1892／93年以前を見ても，この年より高水準である。

(4) 1893／94年以前については，この年を上回る年もある。また，ザカスピ鉄道は1885年に着工され，すでに同年中にはアシュハーバード，さらにはマルヴにまで達した。マシュハド・アシュハーバード間の道路の完成も1890／91年のことである(「90／91年報告」p. 12, Curzon〔1〕vol. 1, p. 214, Entner〔2〕p. 21)。

このような点を考えるならば，報告者のこの議論には無理があるように思われる。ただし，輸入増の背景として，この鉄道と道路があったであろうことを筆者は否定するものではない。

(5) 原語では“corn”・“grain”・“wheat”。本稿では，基本的には史料に即して，「穀物」と「小麦」を適宜使い分けた。

参考文献

イギリス領事報告（年次順）

MacLean, J., "Report on the Trade of Khorassan and Seistan for the Year 1890-91," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1892, LXXX III〔6550-38〕（=「90／91年報告」).

Elias, N., "Report on the Trade of Northern Khorasan for the Year 1891-92," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1893-94, XCV〔6855-21〕（=「91／92年報告」).

Thomson, E. C. Ringler, "Report on the Trade of Khorasan and Sistan for the Financial Year 1892-93," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1893-94, XCV〔6855-155〕（=「92／93年報告」).

Yate, Chas. E., "Report on the Trade and Commerce of Khurasan for the Financial Year 1893-94," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1894, LXXXVII〔7293-99〕（=「93／94年報告」).

Elias, N., "Report on the Trade and Commerce of Khorasan for the Financial Year 1894-95," *Great Britain,Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1895, XCIX〔7828-24〕（=「94／95年報告」).

_____, "Report on the Trade and Commerce of Khorasan for the Financial Year 1895-96," *Great Britain,Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1897, XCII〔8277-18〕（=「95／96年報告」).

Yate, Chas. E., "Report on the Trade, Commerce and Agriculture of Khorasan for the Year 1896-97," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1898, XCVII〔8648-30〕（=「96／97年報告」).

Temple, "Report on the Trade and Commerce of Khorassan for the Year 1897-98," *Great Britain,Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1899, CI〔9044-28〕（=「97／98年報告」).

Whyte, J. F., "Report on the Trade and Commerce of Khorassan for the Year 1898-99," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1900, XCV〔1-5〕（=「98／99年報告」).

Temple, H. M., "Report on the Trade and Commerce of Khorassan for the Year 1899-1900," *Great Britain, Parliamentary Papers, Accounts and Papers,* 1900, XCV〔352-29〕（=「99／00年報告」).

イギリス領事報告以外

〔1〕Curzon, George N., *Persia and the Persian Question,* 1892, London: Longmans Green & Co.

〔2〕Entner, Marvin L., *Russo-Persian Commercial Relations, 1828-1914,* 1965,

Gainesville, Fla.: University of Florida Press.
〔3〕水田正史「西暦19世紀におけるイラン北東部の貿易 ── カスピ海以東のイラン・ロシア間国境の画定以前 ──」『経済学論叢』（同志社大学）第52巻第2号，2000年，82-101ページ.
〔4〕_____「ロシアの中央アジア進出とホラーサーンの貿易 ── 西暦1882～1890年 ──」『社会科学』（同志社大学）第66号，2001年，55-75ページ.